

□わたしの意見

## 文化の

## 地方自治とは？

小島 輝正

△神戸大学文学部教授△



文化の中央集権化が徹底しているという点では、日本はフランスと共通している。あらゆる意味で日本の文化はフランスにおけるパリと同様、東京に集中している。そんなことはない、地方にだって文化があり、文学者や芸術家がいる、という人があるかもしれない。しかし、それは、はつきりいつて一種の気慰めにすぎない。なるほど、ある地方に独特な伝統的芸能や工芸はある祭りもあれば、民謡もある。寺社や建築物もある。それらの一つ一つが貴重な文化財であることはいうまでもない。しかし、それらのものは、まさに「文化財」であるつまり我々が敬意を払い、その維持と継承とに努めるべき既有的財産なのである。文化というものは、そのような蓄積の一面と同時に、つねに新しく生成されていくという一面をもっている。つまり、つねに新しく創造され享受されていくという一面をもっている。過去のものであると同時に、現在のもの、未来を志向するものである。その後者を欠いたら、それは単なる事大主義的な過去への跪拝にとどまるだろう。

そして、その点からいうと、はじめにいったように、日本の文化活動はほとんど全く東京に集中している。一流の作家、芸術家が関西や神戸にも数多くいる。しかしそれらの人々は、中央でも活躍しているから一流とみなされるのである。彼らの作家、芸術家としての生活を支えているのは、中央のジャーナリズムであり、中央の芸術マーケットであって、彼らが何らかの事情で、あるいは好みで在住している地方のそれらではない。

このような状況が変って、文化の地方自治が本当に現実のものになるには、基本的には、日本の政治・社会における地方自治の実現が必要であろう。さしあたってないうることは、そのような甚だ気の長い展望をもちながら、地方で奮闘している才能を出来るだけ数多く発掘しその創造を助けるような営みを持続していくことであるそして、そのための、一見無用な金の出し惜しみをしないことである。

★月刊「神戸っ子」12周年記念文化賞

BM

# ブルー・メール賞

第2回受賞者発表（副賞各部門拾万円）

郷土を愛する人々の雑誌、月刊「神戸っ子」はこの三月号で十二周年を迎えました。これもひとえに皆さまの暖かいご支援の賜と深く感謝いたしております。

さて、月刊「神戸っ子」では、神戸の文化を進めるため、昨年にひきつづき第二回「ブルーメール賞」（青い海）を設定し、各部門別に選考座談会を行なったうえ、左記の四人の方々に賞をお贈りすることになりました。

また、副賞には地元スポンサーのご協力により、各部門の受賞者に十万円が授与できることになり、心からお礼申し上げます。

地域社会の中から世界に通じる文化を育みたく、力いっぱい努力してまいりたいと思います。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

## 文学部門

委員考

小島 輝正・島 京子

鄭 承 博

〈作家〉

不安と模索の現代に、自らの特異な過去の体験を赤裸々に綴り、問い直すことにより、現代に確かな手応えを見い出そうとする、鄭承博氏の文学は、時代を生きた証人としての文学でもある。「裸の捕虜」が文芸春秋より単行本として出た。これからの活躍が大いに期待出来る。



## 音楽部門

委員考

吉村一夫・柴田 仁・小石忠男

矢野恵一郎

〈声楽家〉

矢野恵一郎氏はNHK唱歌コンクールと毎日音楽学生コンクールで三年連続全日本第一位、及び、昨年のMBSこども音楽コンクールでも全日本第一位を受賞し、NHK唱歌コンクールの優勝目指して頑張っている。郷土の誇りとして、今回の賞が贈られた。

〈吉村〉



## 美術部門

委員 考

赤根和生・高橋 亨・増田 洋



丸 耕

〈画家〉

全く限られたスペースで作品のことに触れることができないのは残念だがユニークな抽象絵画から転じて立体絵画とでもいうべきものを制作しはじめ、さらに光を使った造型作品に変貌するなど、果敢な進展を見せる若々しい前衛精神を心からほめたたい。

〈赤根〉

## 芸術部門

委員 考

沼 艸雨・佐野漣箕・富田順三



若柳吉由二

〈邦舞家〉

若柳吉由二は、若柳流の中堅師匠だが、近年古典に、新作に活躍がめざましく、箏曲や琵琶、小唄ぶりなどの振付け、演出にすぐれ、神戸はもちろん、大阪、東京への進出も回を重ね、もつとも将来性のある舞踊家として期待され、門下育成にも力をそそいでいる。

〈富田〉

★副賞協力  
会社ご紹介

石野証券株式会社 神 栄 株式会社

ウシオ工業株式会社 角南商事株式会社

川崎重工業株式会社 株式会社 そごう神戸店

株式会社 神戸 銀行 株式会社 大丸神戸店

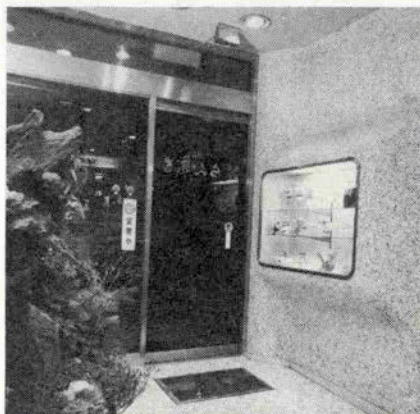
株式会社 神戸製鋼所 バンドー化学株式会社

〈アイウエオ順・二月二十五日迄にご承諾いただいた会社です〉

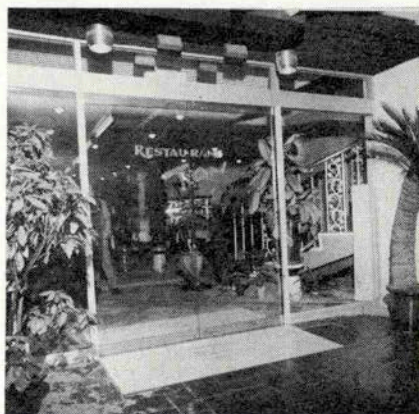
★選考についての各部門座談会を本誌四九頁より掲載いたしております。



ナショナル自動扉が神戸の街で活躍しています！



●名曲を奏でる喫茶“ランブル”



●ナウなムードレストラン“トントン”

ナショナル自動扉はリースも御利用いただけます

ナショナル自動扉であなたのお店もヘンシーン！



お 問 合 せ

修 理 は

松下電工自動扉代理店

ステンレス工業(株)

(331) 8 8 2 5 (代)

## 随想三題



挿絵／小西 綱甫

### 音楽ずいそう

いソノてルヲ

〈音楽評論家〉

最近、日本のポピュラー音楽の世界では混血児が大変にもっている。歌謡曲の山本リンダとか、テレビで司会をしている真理アンヌなんかハーフの魅力を發揮して、かせいでいると言える。

こと、神戸っ子<sup>※</sup>に関して、実は私もハーフである。東京育ちではあるが、母が神戸の出身、大正時代の神戸女学院の生徒なのだ。

そんなわけで、常日頃から日本国中のあらゆる土地の中で、私は神戸が一番好きだと語っている。神戸とのつながりは、戦後まもなくコンサートの司会とか、昔栄えたジャズ喫茶「コペン」出演あたりからスタートしたが、何と言ってもラジオ関西の出演が大きな網になっている。

この放送局が音楽に対して、特

に私の専門のジャズに対して大変に理解のある局であることは、全国あまねく知られているが、昨年の十月から、また週二本のレギュラーを担当させて頂いている。

もちろん、ジャズだけしかわからぬ旧式のD・Jである私を放送に起用してくれたのは、同局の重鎮、神原久孝制作部長であることはまぎれもない。

一本は生放送でさんちかサテライトスタジオから木曜日の昼に放送される。私はこの番組のため、週に一度朝7時に家を出て、胸をときめかせて新幹線に乗る。

今日の夕食はどこのステキにするかな、そのあと三宮か元町のどこに飲みに行くかな?この日は雑用と電話と原稿かきから解放され、酒と女と音楽にひたれる貴重な一日なのだ。

もう一本は日曜の深夜に放送される「サンデー・ジャズ・スポット」。これは全国のあらゆる放送

局のあらゆる番組の中で最も格調高いジャズのパログラムだ。

ジャズはアメリカの黒人が苦悩の中から生み出した今世紀の新しい芸術である。

またジャズはヴァイタリティの音楽でもある。私は戦時中、この音楽は敵性音楽だから聞いてはいけないと言われて興味を持った。その頃から数えると、そろそろ三〇年になる。

黒人が反抗の言葉として創造したジャズを私は無意識の内に自分の信仰にしてしまったのだ。

スイング・ジャーナル編集部、アメリカ大使館員とジャズだけで身を立てて来たが、私に一番向いた仕事は物を書くことでなく、しゃべることだと自覚している。その点、ラジオ関西は青木啓社長以下、担当プロデューサーから玄関番のオジサンまで、私が須磨をお



さんちかタウンのサテスタで放送中のいソノ氏

とづれることを歓迎して下さるの  
で本当にありがたいと思ってい  
る。

春になると、又ぞろ外来タレン  
トが大挙して来日する。ラジオで  
音楽を知った若者たちが次の段階  
でコンサートに足を運んでくれる  
ことは喜ばしい。

神戸だって実際、その街をさま  
よい、食べ、飲み、深く接しない  
とその魅力はわからない。しか  
し、そうすると計り知れない魅力  
のある街なのである。

## うちのお雛さま

### 小西絹甫

〈みやび流押絵家元〉



「あかりをつけましょ、ぼんぼ  
りに……」と歌いながら学校から  
帰る子どもたちの手には、色紙で  
作ったあどけない内裏雛がありま  
した。芦屋川の河川敷きの芝生に  
はやわらかな光がただよい、並木  
の桜がかすかに揺れて、つぼみの  
支度が始まっているようです。

一昨々年、数え年百歳の天寿を  
全うした祖母（初代・絹甫）は、  
毎年このころになると温室咲きの

桃と菜の花を活けて身近かに置き  
「ようよう春が来ましたなあ」と  
感慨深げにつぶやきます。そして  
露地咲きの桃が開くころには「さ  
あ、桃の花を見に行きましょ」と  
近郊へのドライブをせき立てたも  
のです。

うちのお雛さまは祖母の初節句  
の明治五年にととのえられたもの  
ですから、ことしで百一年目の年  
代ものです。私の幼時でも既に六  
十回以上も出し入れしたわけだ  
から、高さ四十センチほどの大型  
で入念な製作であっても、かなり  
手ずれていました。

頭（かしら）を抜き、胴とは別  
々に蔵う仕組みと、古くなったお  
雛さまへの気やすさから、並んだ  
内裏雛の頭を引き抜いて前後の向  
きを変えたり、男雛と女雛の頭を  
取り替えるいたずらをして祖母に  
見つかり、ひどく叱られたことが  
一再ならずありました。

ところが、そんなことをすつ  
かり忘れていた私をハッとさせたの  
は、いたずら盛りを迎えたわが子  
でした。同じように頭を抜き替  
えて面白がっているではありません  
か。自分のことは棚に上げて「こ  
れはうちの宝ですよ。メッソウも  
ない！」と声を荒らげながらも  
「時代は変わっても、子どものす  
ることは同じだわ」と、思わずふ  
き出してしまいました。

雛段の横手に飾る『いちまさん  
（市松人形）』二体は、明治三十  
六年に大阪で開かれた、第五回博  
覧会で求めたものだそうです。背  
丈が約一メートルもある特大型。  
本仕立ての着物、袴などの衣類を  
ぬがせて人形と別に蔵い、翌年ま  
た着せて飾ります。自分と同じほ  
どの人形の着がえを手伝うのが何  
ともうれしく、よく手を引いて歩  
きまわりました。

ものの本に、市松人形や裸人形  
などは「婦人が愛児になぞらえて  
かわいがる人形」とあるのを読ん  
で、一人っ子の私は愛児ならぬ妹  
のような親しみを覚えたのだろ  
うと思います。

雛の節句のごちそうのひとつ、  
蛤の吸物の貝がらで「貝合わせ」  
をしたのも、幼ない日の思い出で  
す。まずきれいに洗った貝の内側  
に、押絵の彩色につかう岩絵具で  
祖母が一對ずつ同じ絵や文字を描  
いてくれます。そして全部の貝を  
伏せ、トランプの『神経衰弱』の  
ように同じ図柄を探がす遊びです  
が、手づくりのおもちゃは子ども  
心にも温まるものがありました。  
女の児のしあわせを祈る雛祭は  
私たちのところのよりどころとし  
て、あとあとまで伝えたい優雅な  
行事です。母の願いをこめた手づ  
くりの押絵のお雛さまは、豪華な  
雛段とはまた別のよるこびを、子



どもに与えるのではないでしょう  
か。

## モスクワ印象記

寺井昭子

〈神戸労働事務局長〉



ソビエトの人々には三つの楽しみがあると教えられた。その第一は食べる楽しみ、第二は見る楽しみ、第三は自然と外気にふれる楽しみだというわけである。もっとも私には、第一の食べる楽しみは肉も魚も大味なあゝの国では、ちょっと納得がいけないのだが。第二と第三の楽しみは、冬の長いこの国の人々の心から切り離せないものであることはうなずける。

モスクワでは、クレムリン大会宮殿やチャイコフスキーホールなどで、バレエやオペラ等をみた。

その内容もさることながら、六〇〇〇人を収容するといわれる大会宮殿の大ホール、クロークの盛大なことは、本当に驚きであった。

開演時間の迫る地階ロビーには観客が詰めかけ、ひとり残らず帽子コートと共にブーツ（持参のハイヒールにはきかえる）まで預けて

行く光景は壮観としかいいようがない。この大クロークの前方には壁一面に鏡がはまっていた、帽子コートを預けた老若男女は思い思いに身だしなみを整え、場内の座席につく。そして、第一幕が終わって休憩となれば、いつせいにロビーに飛び出しエスカレーターに乗って、どんどん、どんどん階上にあがっていく。なにごとかと思つてそのあとに従うと、ホール最階上には二五〇〇人収容のバンケット・ホールがあり。まさに食欲の大饗宴が展開されている。ハムやソーセージののったオリーブ・サンドやさまざまなケーキ、紅茶にコーヒー、レモネードにビール、アイスクリームに果物etc……。三十分の休憩を利用して大いにはくつく姿はなんとも圧巻で「食べる楽しみ」の実演を目のあたりにする思いがした。こうして各幕三十分近くの休憩は場内はからっぽ、大いにロビーが活用され、各階のコナナには書籍・レコードをはじめ、香水や洋品雑貨までが販売されているのは、日本の劇場とは違つて面白かつた。しかし終演が近くなると、帰りを急ぐ人たちがクロークの混雑がふと心配になってきたわが日本人グループの一人が、最後の休けいでコートを受取り、それを小脇にかかえて場内に入ろうとすると、入口

係のおばさんが「ちょっと、ちょっと。コートはクロークに預けておいで！」と手ぶり身ぶりでこわい顔。再びクロークにとつて返すというなんとも日本人的悲しき習性的一幕もあった。ところがである。終演時のクロークの混雑は予想に反し、さつさとスムーズに事が運び、帽子もコートも持主の手にもどるのである。こうしたクロークの設備は、いたるところ完備しており、わんさと荷物を抱きかかえて観劇しなければならぬホールに馴らされた身には美しい限りであった。

さて三つ目の自然と外気にふれる楽しみは私たち日本人の想像を超えるものがある。元旦の昼さがりクレムリンの回りを散歩してみたら、暖冬とはいえ一二度の気温のなかで弱々しい太陽の光を求めて、公園のベンチに大ぜいの人が空を向いて坐っている。また屋外水泳場では湯煙りのなかで泳いでいる人があるかと思えば、氷のはった小川で子供がスケートを楽しんでいるというのも北国ならではの風景でおかしかった。

わずか十数日のあわただしい旅であったが、厳しく雄大な北国の自然と、そこに住む人々の楽天的でしかも着実な生活ぶり、そのなかでの楽しみ方をかいま見る旅でもあった。

# □ある集いその足あと

## ライオン・クラブ

中村 寿男

（ライオンクラブ庶務）



社会人サッカーリーグ 御崎サッカー場にて

ライオン・クラブは神戸高校サッカー部O・Bをメンバーとして昭和四十四年兵庫県社会人サッカー・リーグ四部に登録して誕生。神戸高校サッカー部O・B達とは、神戸一中（現神戸高校）の伝統を受け継ぎ、数々の輝かしい戦歴を残して来た人々だ。昭和四十一年六月に「ボールを蹴って五十年」という神中（神戸一中）サッカー部史をつくった。それによれば神戸一中にサッカー部が発足したのは大正二年九月のことである。こ

の時の指導者は、英国人アガール氏と広島高師出の岩田久吉氏であった。それ以前には蹴鞠会なるものがあって昼休みや放課後、ボール蹴って楽しむ会があっただけである。発足当時の様子を神中15回生前田和一郎氏は「シャツも靴下も、あり合せの白いもの。パンツは来年卒業するものとして、当然不用になるであろうところの夏服のズボンをチョン切って使った。ゴールポストは出来たが、ネットなんてものはなかった。」と書いている。大正六年には、強敵御影師範と覇を競うようになり。大正八年にはチェコ軍艦チームと交換試合をしている。大正十二年、第一回全国高校大会に初優勝を記録した。これはビルマ人チョーデイン氏にコーチを仰いだたまものだ。それ以後順調にその輝やかなしい戦歴を記録してゆくこととなるのである。その時から、御影師範と神戸一中は宿敵同志として打倒「御影師範」打倒「神戸一中」という目標のもとに練習に励むのである。

その頃の様子を北川貞義氏は、「私の先輩達は大毎大会の決勝か準決勝かには、何時も『ミカゲ』と顔が合い、そして負けている。私自身も二年生の時から四年の秋まで大会に出る度に『ミカゲ』に負けた。サッカー部の壁には『怨

敵御影師範を葬れ』とか『涙の日を忘れるな』とか、諸先輩の残した悲涙の念が切々と記されてあった『打倒ミカゲ』の一念に徹して、若者の赤き血潮を燃たぎらせた青春であった」と書いている。

現在のライオン・クラブのメンバーも、相手こそ違え、その若き日を、サッカーへの情熱に生きてきた人々だ。

現在ライオン・クラブの監督の田中芳昭は病後の体を押して試合の指導する。また岡持幸義は、スポーツ用品メーカー、モンブランに勤め、モンブラン・サッカークラブの主将を兼ね、もちろん、ライオン・クラブも全員モンブランを愛用している。対外交渉試合予定など雑務を一手に引き受けている中村寿男。若手の中には、現在の神戸高校サッカー部コーチとして頑張っている。村上守は、黒メガネの山男的風貌。チーム一気短かな渡辺和孝は、最近結婚した、試合には奥さんが応援に来る。実力伯中の試合時には彼の働きが勝負につながる。また阪大工學部の岸本や姫工大の平井は、徹夜明けの眠むそうな目で、試合に駆けつける。ライオン・クラブは、サッカーの楽しさと、気のおけない仲間達との交遊の場でもある。

□連絡場所・中村寿男宅

TEL 861・7069



味のエリート

## デセールショアジ

かずかずの花が それぞれの美しさで  
咲き誇るように デセールショアジは  
ひとつひとつがすばらしい味を  
誇っています。

500円 1,000円 1,500円 2,000円



神戸にそだって75年

神戸  
元町



# 風月堂

元町3丁目 TEL391-2412~5  
さんちかスイーツタウン TEL391-3455

愛の心  
こぼれ落ちた  
ひと粒のパール



## 北村真珠店

元町通2丁目60 TEL. 331-0072

□れんさいずいそう〈3〉

# 春は苦味 にがみ

楠本 憲吉

え・貝原六一



味にも四季がある。

春の味覚は苦味である。フキノトウに始まって、ゼンマイ、ワラビ、ツクシ、セリ、木の芽、ヨメナといった具合にホロ苦さを生命とする植物が登場し、主役を占める。

甘・塩・酸・苦・辛を五味というが、この苦味以外の四味はすべて調味や煮たきで加減できるが苦味だけは材料のもつ、いわゆる持ち味を生かすほかはない。しいていえば、この苦味を生かすのは、ホンノリとした甘みがよく合うようである。

フキノトウにしてもセリにしても、お吸い物の「吸い口」にすれば抜群だが、「アク」に気をつけないと、苦味が勝ちすぎて失敗する。

苦菜というキク科の雑草があるが、春季にやわらかい間の根生葉を採り、ゆでてひたし物かあえ

物にすると、ほろ苦いうちに甘味が漂い、なかなか捨てる難い、乙な味を味わせてくれる。

フキノトウ。

フキの花のつぼみ（花芽）のことをいう。春浅い庭先、雪間の畦などにこれを見つけると、ひとは春の先ふれを感じ、早春の足音を聞く思いがする。

フキノトウは苦味が本領で、この苦味のなかにキク科特有の芳香がある。料理には葉柄の部分を削ぎ、苞のみどりを一枚ずつはがして、こまかに刻み、アクを抜く。

「フキのしゅうとめ」というのは、フキの花がほうけたさまをいう言葉である。念の為。四月ごろには三十センチぐらいいのにびて花をひらく。

蕨の臺 強し女の 靴先きに 憲吉

フキノトウは味噌づけにしても塩づけにしてもつくだ煮にしてもよい。酒のさかなとしては絶妙であろう。

キノメ。

あえものにするキノメは、女ザンショウの若葉のことである。木の芽と書き、料理用語でキノメと発音する。

このキノメと、味噌とすりあわせて調味したものを、季節の野菜類のゆでたものからませたのが「木の芽和」である。このキノメはユズの香りとともに日本料理の二大香料ではあるまいか。

東北、信越ではアケビの芽のことをいう。その他、タラ、タコ、ウコギの新芽のことをキノメとよぶところもある。

キノメツケ、キノメヤキ、キノメデンガクと用途も広く、清汗の吸い口、キノメズシ、更にタイのアラ煮やタケノコのうま煮には欠くべからざるものであらう。

木の芽和え妻の手まざと感じおり 憲吉

ツクシ。

ツクシはトクサ科に属するスギナの子裏穂で、それがほけてしまうまでに、茎とともに摘んで食用にする。

腕一杯に摘んでも煮てしまうと一鉢にも足らぬカサになってしまつて果敢ない思いをした幼年時の追憶につながる野の味のひとつである。

ツクシは袴を取り去つて、行平（なまひら）でさつと渦掻く。

うで汁を捨てて、行平に残つたツクシの中に梅干を入れ、おしたじを入れて煮るのがコツ。

セリ。

腕のセリぶんぶんとしておとろえず 草城

セリは春の七葉の筆頭格である。

根・茎・葉とともに食用される。通常はゆでてひたし物、あえ物、汁の実にする。また「鴨ぜり」といつて、カモとよく調和するので煮合わせに使われる。

ゼンマイ。

ゼンマイの登場はワラビより一步早い。

ゼンマイは山地に自生するシダの一種で、若芽はワラビのようにくるくる巻いている。アクをぬくためゆでるわけだが、ゆでもどしたゼンマイをあまり長く水につけておくと、ゼンマイ特有のうまさが入りなわけてしまう。もどしてから一日二日をもつともおいしいとされている。

ぜんまいのの字ばかりの巖光土 茅合

ワラビ。

シダ植物ワラビ科、早春根茎から新葉を出す。

ワラビの根を砕き、白粉を取り除き、ワラビ粉としたものを葛煉のようにして製したものをワラビモチという。

物の名は所によるか新坂のわらびの餅は

よその葛餅

詠みびと知らず



□れんさい随想〈3〉

# ブラジル

# 無宿

津高 和一 〈絵と文〉

△画家・大阪芸術大学教授▽



今度のブラジル渡航の原動力となったものは、

かねてからの魅力でもあり、扁平な顔をした東洋系民族だといわれているアンデス山脈のインディオたちと接触することにあった。コロンビア、エクアドル、ボリビア、ペルー等に散在する、かつてのインカ文明の後裔たちと、現地のアンデスの山地や砂漠で出会ってみたかったからである。スペインの侵略によって崩壊したインカ文明の痕跡に先ず立ってみたかったのである。

そしてそれが僕にとってどのような作用となるか、どうかは、実を言えばその時でないとわからなかったのであった。それから以後に展開する僕の思考は、その場にいる僕以外のものには想像することもできないものだとかたく信じていた。

先ず、それらへの拠点としてのブラジルが、出発以前の僕の体中を占領していたのも確かである。

一九五九年といえは現代絵画はアンフォルメル全盛時代に移行しつつあった頃でもあった。

ブラジル在住の日系の画家たちは、日本は勿論アメリカ、ヨーロッパ等の出版物で世界の動勢をよく承知していたとおもわれる。

リオまで出迎えてくれたマベ氏等も、日本の美術雑誌等で僕たちの仕事はすでに見聞していたのであろう。

世界で最多の日本移民国ではあったが、第二次大戦以後、本国からは棄民同様の扱いをうけた日系人たちにとって先ず居直ることが先決となった。日本の故郷へ錦を飾るということが、戦後実感を伴わなくなった、ということも聞いた。

身内のものの誰かが死に、その墳墓と対面しそれを意識したときに始めてこの地に居座ることの实感が起こるのだ、ということも後日移住者たち

から聞いた。苛酷な悪条件と闘いながらの開拓の営為は大変なことだったにちがいない。その成果は日系人たちの有形無形の信用となってブラジル人たちの共感を得ていた。戦後のどさくさに、勝ち組、負け組の日本人たちの出現があって、この二つの流れは、当時の日系人たちの評価を割引きする結果となったそうだが、それも過ぎ去ったいま、日系人たちにとってそれらをたづねることは恥部に触れられる思いのようだった。なにはともあれこの国の人々はくつたくなの明るさを持っていた。当時、通信を依頼されていた東京のA新聞紙に、『未開と文明が背中合わせになっている国である』と書き送ったことを覚えている。『また明日』という言葉が日常のあいさつにもなっていた。人種の偏見のないことがなによりもたのしい現象だった。

黒人たちも活気を見せていたし、混血も複雑で多様だった。からりと晴れた朝、何処かのルーア（通り）では一週一度は露天市が開かれ、午前中は通行止めになるのである。日常生活に必要なものならなんでも売っていた。このフェラー（市場）で、山のように積み込んだトラックから手押し車にいたるまで、商品の売声も威勢がよかった。黒人の少年たちは使い走りや、荷物持ちでチップのかせぎどきでもあった。

イブラプエラにある巨大な倉庫のような三階建の美術館が、隔年毎に開催されるサンパウロ・ビエンナーレ会場だった。これはマタラーゾという財閥の寄贈によるものだった。実にばかでかい公園の中にあるこのガランとした美術館はまるでブラジルを象徴しているかのようにだった。

ベニス・ビエンナーレと対象的に隔年展をくり

返していた。当時、首都のリオ・デ・ジャネイロから荒野を拓いてブラジリアに首都を移す作業が最終段階に近づいていた。ブラジルが生んだ偉大な建築家ニーマイヤの設計によるものである。

こそも思い切ったスケールの大きさだった。セメントまで飛行機で運ぶんだからやりきれない、とブラジル人たちの声を聞いたものである。クルゼイロ（貨幣）の不安についてのぐちというものであった。だが、それもそんなにくよくよしている風には思えなかった。八月下旬から美術館ではビエンナーレ展のために各国の陳列作業がぼつぼつと始まっていた。この国の人夫たちは思うように働かなかった。実に悠長なものである。

日本から来た人間が先ず受ける洗礼のようなものは、この悠長な生活のリズムが歯車に噛み合わないことだった。イライラが嵩じてノイローゼになるものもいた。

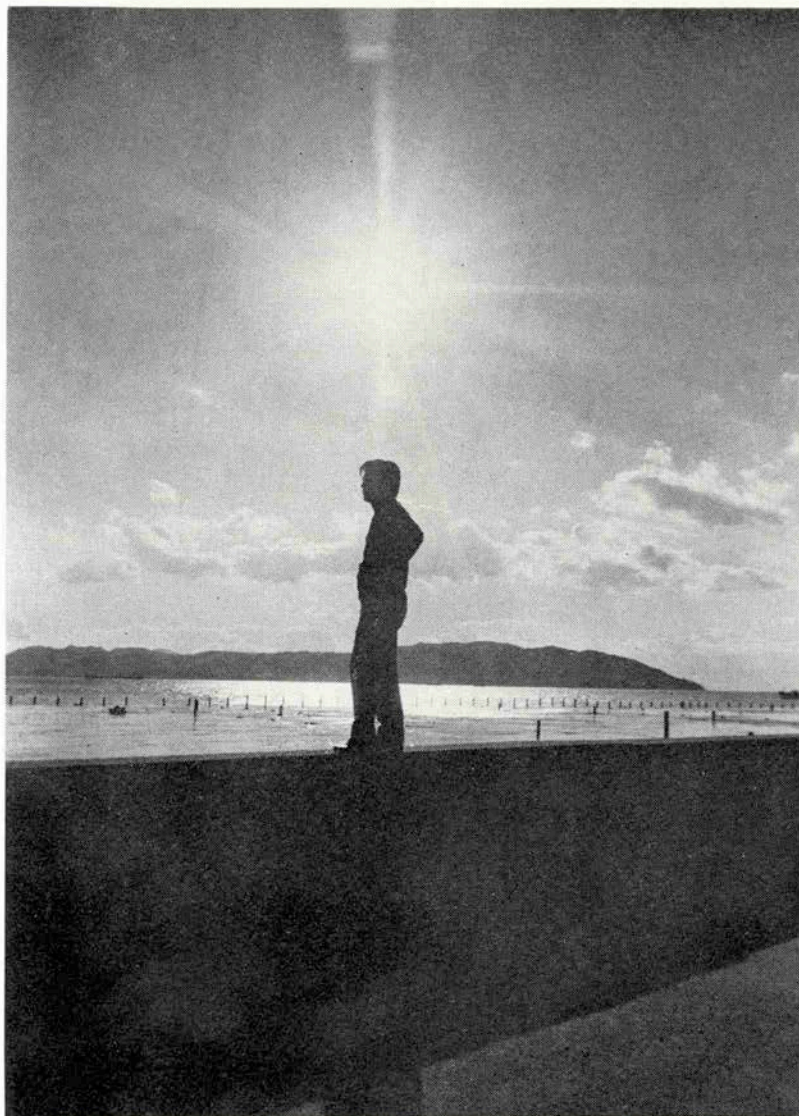
ここでは日本流の恥や外聞にこだわってはいへ生きれなかった。日本の僕の近所にあるK大出身の若者と出会ったが、軒店でおでん燗酒を売っていた。話を聞けば、移住してきた当初は路ばたでみかん箱の上にキャンデーを並べて売ったものですと、話していた。僕は終戦のどさくさの神戸の高架下の闇市のことを瞬間おもい出したりした。人間やろうと思えば何んでもできるというものである。その裸の強さのようなものが、ここで生活するとなれば必要だった。

あのサンバのリズムを愛し、フットボール（サッカー）に湧く人種混合のナシヨナリテイこそ明日を切り拓くエネルギー源につながっていた。僕は、何等の予備知識もなくこの混とんの渦中に立たされたのである。

MY・KOB E 〈3〉

# 垂水・舞子海岸通り

筒井康隆 カメラ・杉尾友士郎



淡路島に近い舞子海岸



まず、朝起きる。

朝といっても、五時頃の時もあり、昼過ぎの時もある。昼過ぎはふつう、朝とはいわないが、ぼくにとっては朝である。

起きたばかりで、当然頭がぼんやりしている。そこで散歩に出かける。頭を冷やすためである。

坂を下り、垂水銀座という商店街に入る。

「文進堂」という、垂水ではいちばん大きい本屋があり、一日一度は必ずここをのぞく。本を買う時もあり、買わずに立ち

読みだけする場合もある。ぼくは、本を買うのはなるべく一軒の本屋さんで集中的に買う。ない本があってもよその本屋へ行かず、同じ本屋さんで注文してもらう。立ち読みを黙認してもらうためである。

商店街を抜けて垂水駅へ出る。国鉄と山陽電車の

「垂水駅」が高架の上に並んでいる。この高架下が「たるせん」という商店街になっていて、いちばん西には食堂街もある。ひと昔前には考えられなかったほど賑やかになったそう。垂水にマンモス団地がいくつもできたからである。

高架の東のはずれ、垂水駅東口には「上島コーヒー店」がある。略称UCC。ぼくはいつもここでコーヒーを飲む。垂水ではいちばんコーヒーのうまい店であるが、欲を言えばブルー・マウンテン、ウガンダ・ロブスターといったストリート・



垂水神社の大鳥居

コーヒーも飲ませてもらいたいのものだ。「上島コーヒー店」は「たるせん」食堂街にももう一軒ある。神戸に「上島コーヒー」が多いのは、ここが本拠地だからである。今や東京はもとより、全国どこへ行ってもUCCの看板が目立つようになった。よくぞ発展し、よくぞ儲けたものだ。妻が学生時代、この上島さんのお嬢さんと同級だった。

コーヒーを飲んでしまうと、冬ならパチンコ屋へ行き、夏なら海岸へ行く。須磨水族館のあたりから朝霧まで、国道二号線山陽道が海岸沿いに走っていて、この通りには昔の宿場町のおもかげが残っている古い家並みがあったりする。大きな格子窓のある家など、いかにも街道筋の旧家といったたたずまいで、ぼくは大変好きである。

海岸へ出る。散歩するだけの時もあるし、泳ぐ時もある。釣船が浜に並んでいる。水は最近少し汚れているが、泳げぬこともない。

この海岸から西には、須磨浦公園まで、平磯の灯標以外たいしたものはないはずだ。この赤と黒の灯標は、海岸からはすぐ近くにあるように見えるので、ちよいと泳いで行けそうな気がする。しかしまあ、やめておいた方が無難だろう。このあたり、潮の流れは意外にはげしいからだ。だから泳ぐ時も、なるべく堤防の中で泳ぐようにしている。ときどきは堤防の上で釣りをしている連中に針を



国道二号線を西へ、西へと行く

三柱を祭っている。むろん、海の神様である。わが家を建てる時、この神主さんに地鎮祭をやってもらったし、息子が七五三で世話になったりするから粗末にはできない。境内の夜店はなかなか賑やかで楽しく、ぼくも息子の手をひいてよくぶらついたりする。神社正面には海に通じる広い道があり、そのはずれの砂浜に大鳥居があって、十月十一日にはみこしが海を渡る。

海神社の筋向かいが垂水警察署。まず、こういう警察署は日本では他にあるまい。洒落た木造の西洋館で赤い屋根、柱にはごてごてと装飾がされていて窓にステンドグラスの入った警察など、他のどこにあるか。もともとはこの建物、ある成金の別荘だったらしい。ぼくは猟銃の許可を得に二度ほど行ったが内部の階段や廊下もたいへん豪華なものである。海に面した裏庭は芝生になっていて、射撃訓練用の標的さえなければ、ここが警察の庭とは誰も思うまい。頓間な泥棒だと、金持の家と思って盗みに入るかもしれない。

国道二号線を西へ、西へと行く。

舞子公園のあたり、浜側に、「亀屋」という目立たない、ちいさな小さなうどん屋がある。この店の豚うどんというのが減多やたらにうまいのだそうである。食べるのを楽しみに歩いたのだが、あいにく休みだった。一日に三百杯も売れるのだそうだ。

さらに西へ行くと、「移情閣」が見えてくる。

有名な八角堂である。呉錦堂という金持の建てた別荘で、一時孫文もいたことがある。この建物のことはいろいろな人が書いているから、くどくどしい説明は省く。

国道の北側に海神社がある。

ひっかけられたりもする。むこうにいわせればそっちが勝手にひっかかってきたというだろう。さいわい、釣りあげられたことはまだ一度もない。

この神社の広い境内は国鉄垂水駅のプラットホームから見おろせる。上津見とか中津見とか底津見とかいった、にがり酒の神様みたいな名前の



このあたりまでくると、もう淡路島が鼻さきにあるような気がする。ほんとに、泳いで渡れそうな気がするくらいである。事実、泳いで行こうと試みた人もいるらしい。舟をしたがえて出発したそうだと。ところが途中で舟とはぐれてしまった。ご本人はその翌朝、半死半生で岩屋の浜にうちあげられたという。

前にも書いたように、潮の流れがすごく急なのである。おまけに海面近くと底の方では流れが違っている。海神社の神様が上津見、中津見、底

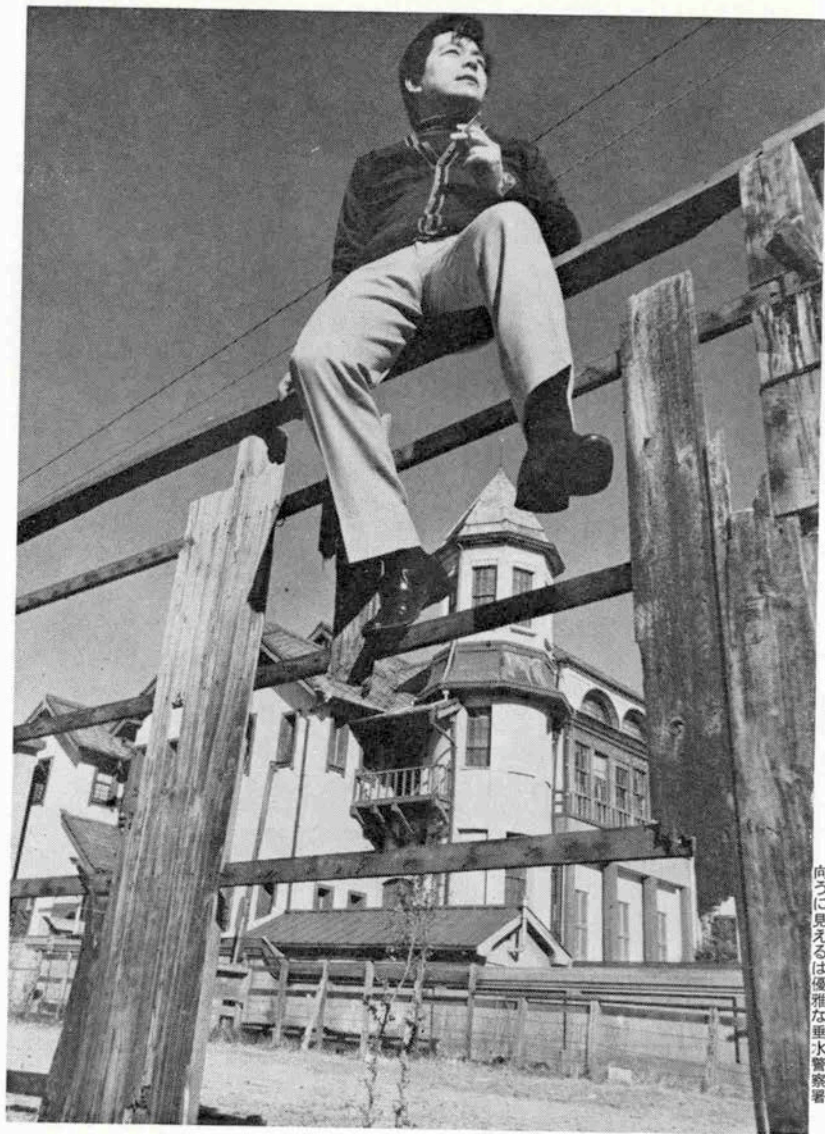
津見と三柱にわかれているごとく、何層にもなっていて異なった速さと方向でもって流れているらしいだからここで溺れた人の死体はどこへ行ったかわからなくなってしまう、まず発見できないそうだ。岩屋の浜にうちあげられた泳ぎ自慢の人など、幸運だったと言わねばなるまい。

国道の山側は舞子公園。

有名な舞子の松は、国道をひっきりなしに通る車の排気ガスでもはや見る影もない。悲しむべきことである。

(作家)

向うに見えるは優雅な垂水警察署





A black and white portrait of a woman with long, wavy hair and bangs. She is wearing large, white-rimmed sunglasses and is smiling broadly, showing her teeth. The background is a plain, light color.

★

★

服部メガネ店

3 月 3 日

おさな子の心の思い出を  
大切にしてください。



ドイツ菓子

Fahrenheit's

工-八丁

本社	三宮生田神社前	TEL(331)1694
三宮店	三宮大丸前市電筋	TEL(331)2101
さんちか店	三宮地下街スウィットタウン内	TEL(391)3539
貿易センタービル店	三宮貿易センタービル地下1階	TEL(251)0139
さんプラザ店	三宮センター街さんプラザ地下1階	TEL(391)1896
心斎橋店	大阪心斎橋筋大丸前	TEL(252)0925
阪急三番街店	梅田阪急三番街地下2階	TEL(372)8823